OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	山代巴「或るとむらい」について : 農村女性の連帯の問題を中心に
Author(s)	コマストリ, キアラ
Citation	待兼山論叢. 文化動態論篇. 2015, 49, p. 35-52
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/61354
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

山代巴「或るとむらい」について

――農村女性の連帯の問題を中心に――

キアラ・コマストリ

キーワード：山代巴／農村女性／広島／原爆／戦後文化運動

はじめに

山代巴（1912～2004）は、1955年の1月から12月まで『平和ふじん新聞』に連載され、翌年の8月には筑摩書房から出版された『荷車の歌』で知られている作家である。のちには、全国農業協同組合の婦人部が1人10円のカンパで資金を集め、全国の農村女性の自発的な協力のおかげで、1959年には映画が製作された。山代巴の主な活動舞台は広島県の備後地方の農村であり、1950年代後半から彼女は集中的に農婦を対象にした生活記録運動に尽力し、多くの書物を残した。

山代巴の拠点が農村にあったことは確かであるが、拙論「山代巴・平和と自立への道を求めて――被爆地広島と農村女性をつなぐ《表現》と《運動》――」[1)]で明らかにしたように、40年代後半から山代巴は広島の被爆者と深い関わりをもち、その経験は彼女の人生と思想においてきわめて重要な役割を果たした。

本稿で論じる「或るとむらい」（『世界』1951年12月号）は、被爆者との出会いがきっかけとなって書かれたものであり、広島市内から農村へ逃げた被爆者の家族が、閉鎖的な農村共同体の中でどのように生き抜いていくかということを語っている。この作品は、山代巴が広島県の山地で集めた聞き書きに基づいており、閉鎖的な農村共同体の実態を直視しつつ、当時の原爆に

ついての農村一般の認識を描いているきわめて重要な作品である。しかし、それにもかかわらず、現在まで「或るとむらい」は文学批評や研究においてほとんど取り上げられることなく、忘れられてしまった作品となっている。

まず第一節では、山代巴の初期小説としての「或るとむらい」の位置づけを考え、その成立背景について論述する。第二節では、ジェンダーの観点から「或るとむらい」の主題について検討する。第三節では、「或るとむらい」が原爆文学として位置づけられた経緯について論じ、第四節では、テクストの分析を行いながら、物語の主人公であるアサ代の女性像について考察する。本稿は、「或るとむらい」の文学的意義を検証するとともに、この作品が、山代巴文学の中心テーマとなる農村女性の連帯における大きな転換点を示していることを明らかにする。

一　初期小説のなかの「或るとむらい」

「或るとむらい」も含めた 50 年代初頭の山代巴の小説は、彼女が日本農民組合広島県連合会の書記局の仕事を通じて聞いた話や、彼女自身の農作業の体験と重ねて創作された。それらの作品は、農村女性がおかれている苛酷な現実を淡々と描いており、民主主義や人権意識など、戦後の新憲法下の新たな価値観が定着しづらい戦後の農村の姿が窺われる。

「或るとむらい」に着目する第一の理由としては、原爆投下から 6 年目という比較的早い時期に被爆者と農村を結びつける作品となっている、という点を挙げることができる。原民喜の『夏の花』（1947 年）や大田洋子の『屍の街』（1948 年）など、広島市内を舞台にした自伝／体験小説はこの時点でもすでに出版されていたが、「或るとむらい」のような、地方に目を向け、農村の中の被爆者を描いている作品は見当たらない。

この作品に着目する第二の理由は、「或るとむらい」が農村におけるジェンターの問題に注目している点にある。同時期に発表された「芽ぐむころ」（『新日本文学』1951 年 1 月号）にも、被爆者は登場するが、その被爆者は共

同体のなかで裕福な立場にある男性である。それに対して、「或るとむらい」に描かれている被爆者の一家は、他所から入ってきた「旅の者」と呼ばれる人たちであり、さらに原爆によってすべてを失ったために極めて貧しく、全員女性である。つまり老女と彼女の娘と孫は、その村において、最も“底辺の人間”という立場におかれているといえる。

「芽ぐむころ」や「いたどりの茂るまで」(『世界』1950年4月号)などと異なり、「或るとむらい」では、はじめて農村の人間でない者が登場し、農民コミュニティの内／外、また定住／移住といった二項対立が強く意識されている。よそ者を排除し、お互いに監視する、「落し合う」村の現実をいかに打破するかが、山代の戦後の文学活動の最も大きな課題であり、繰り返し登場する重要なモチーフである。「或るとむらい」は、農村女性の連帯の問題における大きなターニングポイントを示しているという意味で、注目すべき作品だと考える。「或るとむらい」における女性同士の連帯に関する作者の問題意識は、これまでに書かれた小説の主人公と比べて「或るとむらい」の主人公アサ代において先鋭化しており、その意味で、のちに書かれる代表作『荷車の歌』の原点となる作品だと思われる。

1946年の夏に、山代巴は広島の農民組合での仕事を始め、最初の取り組みとして、彼女はまず各組合に婦人部設置を提案し、その組織化に奔走した[2)]。広島県農民連合会の婦人部の代表として、備後の村々の会場を歩くことになった山代巴は、農民の集まりに参加するなかで、一つの重要な問題を発見していく。それは、集会に集まっても、女性たちがほとんど発言しないということである。しかしながら、何も言わないということは、意見を持たないということではない。集会が終わった後に、帰り道ではじめて、女性たちはさまざまな意見を出してくる。これに気づいた彼女は、何が部落の集会でこの女性たちを黙らせているのか、農村女性はなぜ本音が吐けないのか、と女性たちに直接聞いた。彼女たちは、相手を信用して打ち明けた秘密が、すぐに知れ渡ることになり、結局、それが姑や近所姑など、聞かれては困る人の耳へはいってしまうためだと答えた。仲間同士でも常に監視し合ってい

る人間関係のなかでは、民主主義や人権意識は生まれてこないと山代巴は痛感した。このように、農村における女性の連帯の問題が婦人部づくりの一つの焦点になり、この時期の創作の主なテーマにもなっていく。

婦人部での活動のなかで、「三つのものさし」が発案された。その三つとは、まず「秘密の守れるふところになる」（つまり集会で打ち明けられたことを誰にも言わない）こと、「仲間への批判は補足に」なるようにすること、そのために、民衆自身が「表現力を持つ」ことである。山代巴の思想の基盤となるこれらの三つの柱は、創作において具体的にどのように表れているのか。山代巴は、農村女性の日常の暮らし方において「批判すべき」ことを「鏡にうつすように」記録し、このように集められた話を主材にして物語を創作していた。[3)] もちろん、誰の話をしているかということがわかると、本人に迷惑をかけることになるため、「誰のことかわからないように」し、自分自身の経験も加えながら書いた。つまりそれは、「秘密の守れるふところにな」ることである。最終的な狙いは、「農民の気持ちにぴったり合う」[4)] ような話を農民に聞かせることによって、「鏡を見て、自分の顔に墨がついているのを知ると墨を拭く」[5)] のと同じように、物語という鏡のなかに自分を発見させ、「補足になる」自己批判をさせることであった。

「或るとむらい」の基になった聞き書きを集めるきっかけとなったのは、1947 年の夏に備後地方の 22 ヵ所で開催された夏期大学であった。広島県労働文化協会が主催となった夏期大学は、農民や労働者を対象に大学の教授や文化人が講義をし、最後に総合討論が行われるという画期的なイベントだった。この機会に山代巴は、甲神部隊という被爆者の大集団の実態や、農民の原爆に対する意識の低さなどを知る。「或るとむらい」においては、まさに被爆者と農村が出会い、ぶつかり合うところを捉えることが試みられたのである。

二 「或るとむらい」の女性たち

前述したように、「或るとむらい」には、広島市内から移ってきた被爆者の家族が、農民たちによってどのような扱いを受けるかが描かれている。村の人間関係が、内／外、定住／移住という二項対立においてとらえられていることは、すでに述べた。さらに重要なことは、「いじめる農民たち」と「いじめられる被爆者」、つまり加害者／被害者という二項対立が、はっきりと描かれていることである。

まず、内／外という二項対立について述べると、その隔たりは、村に定住している農民たちには固有名詞が与えられているのに対して、老女とその一家、また同じように疎開してきた二人の戦争未亡人には、名前が与えられていないことによって強調されている。老母と娘の役割も、地方（内）と都会（外）との距離を意識させ、封建的で閉鎖的な農村社会を際立たせている。

都会から来た「教養ありげな感じ」の娘は、不平等な扱いを受けたことを職場で知人に話すと、それがすぐに民生委員の重造の耳に入ってしまう。「戦争未亡人の貧困者という肩書で〔……〕世話になった」くせに、まったく恩知らずだと厳しく叱責される。[6]「猫の死にがら程の荷う（ママ）引いて来あがった癖に」と、村のほかの人々からも、強烈な批判を受ける。[7] また、森の道を開墾して老女が植えた野菜は、「ここあ畑じゃーなあど〔……〕誰にことわって植えたんのおバーさ」と雑草といっしょに全部焼かれてしまうが、しばらくすると、その土地は村のボスたちに野菜づくりのために使われはじめた。[8]「みんなが誰にことわってこの道ばたを使うのかね」[9] と老女が聞いても、ただ無視されてしまうのである。

老母と娘は、封建的な農村の慣習とは異なる価値観を持っており、何よりも不平等な扱いを見極め、指摘する力を備えている。しかしその力は、日々の“陥れ合い”のなかで次第に衰えていく。[10] 重造という村のボスに厳しく叱られた娘は「すみません、すみません」と頭を下げ、黙って耐えてしまう

ようになる。老母も、農業労働と原爆症で次第に衰弱し、周囲の無関心のなかで、ついに命が尽きてしまう。母親の死は、原爆の恐ろしさを象徴するというより、むしろ不平等への〈抵抗の精神〉の「死」を表しているように思われる。そういった意味では、この母娘がいじめられていることは、被爆者であることとはほとんど関係がないといえる。実際に、「或るとむらい」には、「原爆」への言及はほとんどなく、唯一〈被爆者らしく〉描かれているのは「ピカババー」と呼ばれる老女だけであり、彼女の娘とその子供に関しては、どのような被害を受けているのかも示されていないままであり、彼女らと「原爆」を結ぶ描写は、テクストには見当たらない。

それにもかかわらず、「或るとむらい」が原爆文学の枠組において評価されてきたのはなぜだろうか。

三　「原爆文学」としての「或るとむらい」

原爆文学研究者の長岡弘芳は、この作品について、「当時の農村におかれた被爆者の実状を、農村の実態および農民意識の側から描いたもの」であると述べ、「部落から村八分的に扱われてきた女ばかり三人、被爆者一家の老女のとむらい当日―よそ者である被爆者の老女には墓地を貸さぬと言い渡すまでの一日を辿って、被爆後の数年彼らの置かれてきた無惨な実状をそのままに描き出す」と、老女と娘が被爆者であることを強調している。[11)]

しかし、すでに述べたように、老女とその娘がこのように「無惨な」状況におかれていることは、被爆者であることとほとんど関係がない。むしろ二人が「旅の者」であり、無産者であり、女性であることが、排除されてしまう大きな原因になっているのではないか。二人に対して農民たちは、「被爆者」という言葉はいっさい使わず、老女に対して「不幸者」、「因業」、「因縁の悪い者」という表現を用いている。村の人々は、よそ者の墓は、無縁墓になる可能性が高く、老女の「魂がこの谷間にとどまって、とりつきでもしたら困る」と考えているのである。[12)] そのため、村には、「一代限りの旅の者に

は墓地は貸さ」[13] ないという慣習が存在する。このように二人の女性が差別されている理由は、被爆者であるからではないということが分かる。

ところで、原爆文学のアンソロジーである大江健三郎選『何とも知れない未来に』（1983 年、集英社）には、大田洋子の「ほたる」や原民喜の「夏の花」といった原爆文学の名作とともに、「或るとむらい」が収録されている。その対談解説には、『原爆文学史』で「或るとむらい」を取り上げた長岡も携わっている。そこで、大江健三郎は、「或るとむらい」について、「〔被爆者が〕どんなにつらいひどい目に遭うかということを、むしろ被爆者を受け入れない側の人間から描いている」[14] と指摘し、「農村の実態および農民意識の側から描いた」という長岡の評価に賛同しつつ、原爆の問題より、立場（positionality）の問題に注目している。

大江健三郎の指摘において重要な視点の問題、つまり「加害者／被害者」の立場の問題から「或るとむらい」にアプローチしてみると、この作品の核となる女性の問題が浮かび上がってくる。長岡と大江の評価においては、ジェンダーの観点が欠けているということも、指摘しておきたい。

山代巴は、虐げられている老女とその娘の立場からではなく、二人を排除しようとするアサ代という村の女性の視点から描いている。物語は、三人称で語られるが、焦点はつねにアサ代に当てられている。読者は、彼女の“心の声”を聞くことができ、彼女の目を通して農村の現実を眺めることになる。このような“加害者側から描く”という手法は、たとえば「いたどりの茂るまで」においても用いられ、「鬼」のように振る舞うオリカの立場から、物語が語られている。「或るとむらい」においては、農村の外の人間が登場することによっても、加害者側の意識がさらに強調されているといえる。このように“いじめる側”の人間に焦点を当て、その人間が女性であることには、もちろん作者の明確な意図が込められている。しかしそれは、大江が言うとおり、「非常にエゴイズムの強いおばあさんたちを決して否定」しないし、一方的に批判することでもない。[15] 山代巴の意図は、むしろ、農村女性の現実を理解し受け入れたうえで、彼女たちに自らの加害者性に気づかせる

ことにあった。農民組合の婦人部での経験から、作者の意図は、「鏡を見て、自分の顔に墨がついているのを知ると墨を拭く」ように、批判するべきことを、鏡のように物語のなかに発見させ、自己反省させることにあったのである。[16)]

四　アサ代の女性像

しかし、山代巴が彼女たちに気づいてもらいたいことは、自己の加害者性だけではない。自分が「加害者」でありながら、「被害者」でもあるということに目覚めさせることも、きわめて重要なことであった。このことは、「或るとむらい」においてはっきりと表されている。物語の前半では非常に明確であった「加害者／被害者」という境界線が、次第に曖昧になり、完全な「加害者・悪者」であったアサ代は、「加害者にならざるを得なかった被害者」へと変化していく。物語が展開していくうちに、読者はアサ代の過去を知ることになり、現在の村での地位を勝ちとるために彼女がどれほどつらい思いをしてきたかということや、アサ代にも虐げられていた時期があったことが明らかになってくる。この点は、農村で生き抜いていくために「鬼にならざるを得なかった」「いたどりの茂るまで」のオリカと共通しているが、「或るとむらい」では、アサ代自身による訴えかけが強く、心理描写もいっそう深いため、加害者／被害者性の《境界の曖昧さ》が強く印象づけられる。

物語のなかで、アサ代は、足にできたこぶの由来を息子に聞かれると、

> 嫁に来て、まだ睨まれれば食うものがのどを通らぬ時分、わしは産み月の腹をかかえてホボロを売った〔実家へ逃げ帰った〕が、この家からは迎えに来手がない。子が生まれたと知らせても返事がない。わが身一つなら帰りたい家でもなかったけれど、生まれた子を見ては、おめおめ離縁にはなれん。産んで十日もたたん子を抱いて、四里の坂道をもどっ

て来た。[17)]

と語り、次のように息子に訴える。

> 待ってもくれん家へ、喜ばれもせん子を抱いて、四里歩いたんど、わしは。子を三人産み四人産み、年も三十を越えてくれば、男のする仕事なりと、女のする仕事なりと、これが出来んもののない女ごになった。……食わせるのが惜しいお前らのお父さんに向いて、睨みゃー睨む方へ振り向いて食うてやる、食わずに働けるか言うて、逆らう度胸も出来た。……このころは脛が火を出す働きで、腓の肉が燃え切れたらしい。見てくれこの足を。[18)]

アサ代は、「睨まれれば食うものがのどを通らぬ時分」、つまりまだ若くて繊細だった時期に、嫁家での扱いに耐えられず、実家へ逃げ帰った。この行為は、広島の農村では「ホボロを売る」といわれ、当時日常茶飯事であったことは、山代巴の他の作品からも分かる。それほど、女性の農村での生活、特に家の中の生活は苦しかったのである。嫁ぎ先へ二度と戻らない人もいるが、アサ代は「産んで十日もたたん子を抱いて」戻ることにした。女性が不利になる農村の世界では、勝手に家を出ていった嫁と、生まれた子供の運命が明るいはずはないからである。婚家に戻るというアサ代の決心には、彼女の意地も読み取れる。四人の子供を生み、辛抱に辛抱を重ねながら、彼女は「出来んもののない女ごに」なり、夫のいじめに「逆らう度胸も出来た」という。「青い筋がもつれて」浮き上がっているアサ代の「こぶ」は、まさに彼女の重労働の人生を象徴しているのである。[19)] このこぶができるほどの辛抱があったからこそ、「この組うちの男衆の中で、言いたいことを言うて通ること」ができるのだとアサ代は自慢している。[20)]

「鬼でのうて、この自小作百姓が立って行こうか。……お前等の食う米はのう、鬼にならにゃあつくれるんじゃあなあどう」と「いたどりの茂るま

で」のオリカは訴える。[21] また「芽ぐむころ」のオフウも、「石地蔵じゃあなし、金仏さんじゃあなし、にらむ方へ振り向いて食え、食わずに働けるか、根くらべじゃ、負けなよ」と食事の時に夫に睨まれる娘を励まそうとする。[22]　彼らは皆、嫁の時代にアサ代のようにつらい思いをし、長年の苦労に耐えて「逆らう度胸」のできた女性たちである。しかし、この「逆らう度胸」は、一人ひとりの心の中にしまわれ、家から外へ一歩を出ると、女性同士でもいっさい共有されることはない。それは、農村という世界では、自分にとって悲しいことや腹立たしいことを一度口から出すと「とんでもないことになってはね返ってくる」からである。しかも、すでに弱い立場にいる者は、「一層窮地へ追いこまれていく」ことから、弱者ほど「もの言わぬ人」になっていく。[23]

「或るとむらい」に登場する娘も、工場で味方だと思っていた人に心を打ち明けた結果、それが村のボス重造の耳に入り、その返報は恐ろしく「とんでもないことになっ」た。それ以来、娘はいくら責められ、不条理なことを言われようと、いっさい言葉を返すことがない。つまり彼女も、「もの言わぬ人」になってしまったのである。

ここまで論じてきた通り、加害者側から描くという手法は、読者や聞き手[24]に登場人物たちへと感情移入させ、自分自身の加害者性に目覚めさせると同時に、その被害者性をも意識させる。そのような両面性が、誰のなかにでも存在するということを理解させることによって、山代巴は仲間意識・連帯の醸成を目指していた。

作者のこの意図がどのような表現を通して形象化されているについて考えてみよう。同時期に発表された他の小説と同じく、「或るとむらい」は備後の村々で聞いた話を「誰のことか分からないようにして」、語り部となって書くという仕方で語られている。ここでは、編者、また代筆者というかたちで関わった被爆者の手記集『原爆に生きて』と異なり、山代巴は農村女性の代弁者となっている。農村で生まれ育ち、農村を主な活動舞台としてきた山代巴だからこそ、農村女性の心を「リアリズムに立ったあたたかさ」[25]を

もって描き得たといえる。人々の暮らしの描写が非常に丁寧になされ、農民の内面も詳細に描かれている。また、備後方言を積極的に取り入れた長い会話文も、さらにリアリティを与えているといえる。

「或るとむらい」では被爆者の描写がほとんどなされていないという点も、小説のリアリティの問題と密接に関連していると考えられる。自分と同じように備後の農村で生まれ育った女性の心は描けるが、都会の、そして被爆者の心は描く自信がなかったのではないだろうか。実際に、のちに広島へ移り住み、被爆者と深く関わった後も、山代巴は常に代弁者としてではなく、手記集『原爆に生きて』では、被爆者の代筆者として、ルポルタージュ『この世界の片隅で』では、社会の周縁や底辺で生きている人々の取材者として書いている。創作の範囲が、作者が知っている農村の世界に限定されているということは、ある意味では“限界”であるかもしれない。しかしながら、山代巴が〈農民女性の代弁者〉として果たした役割と、彼女が一生取り組んだ〈女性同士の連帯の醸成〉という目的を考えると、このように「リアリズムに立ったあたたかさ」をもって描けるということは、むしろ山代巴文学の達成であるといえるのではないだろうか。

「或るとむらい」は、この〈女性同士の連帯の醸成〉において前進がみられる。老母の死は、〈抵抗の精神〉の「死」であり、娘の沈黙は、農村の日々の暮らしのなかで、「もの言わぬ人」になってしまったことを象徴している。しかし、物語の結末を見ると、それまでの小説と大きな違いがあり、必ずしも絶望的な終わり方ではないということに気づく。それは、物語の途中から加害者／被害者の隔たりが次第に小さくなっていくことと関連している。加害者の立場から被害者の立場へのシフトは、読者がアサ代のつらい過去を知るようになる時に見られる。しかしながら、アサ代と村に住んでいる人々との関わりを見ていくと、彼女が現在においても虐げられていることがわかる。もちろん、アサ代は決して貧困者ではなく、足にできた大きな「こぶ」に象徴される長年の重労働が、彼女に比較的高い地位を与えている。泥などを取らずに野菜を売ろうとする村のボスの重造に、「全くこすい、泥ど

も落として、かたい葉は取ってはからんにゃー。買う者の気にもなってみるがええ」[26]と、「重造に向いてそんなことを言う女はアサ代だけ」である。そして重造は、「アサ代の言うままに」した。しかし、アサ代が村のなかで、ある程度の地位にいたとしても、彼女と他の農民たちとの関係には、尊敬も友情もなく、不信と意地しかないといえる。重造から家族のことで頼んでもいないアドバイスを受けると、丁寧な言葉で礼を言うが、「この男に嫁とりのことまで干渉させるものか」[27]と心のなかで彼女は思っている。このようなお互い監視し陥れ合う関係にいるのは、アサ代と重造だけではなく、村に住んでいる他の人々もそうである。つまりこのような社会では、仲間はおらず、敵ばかりなのである。

このように次第に加害者から被害者へシフトしていくアサ代の人物造型は、物語が展開するにつれ、大きく転換する。老女の葬式後の宴席で、アサ代は一度帰ろうとするが、「ふと忘れものをしたような、考えてみると皆にののしられているような、そんな気が」して酒の座に戻ることにする。それは、「この組うちの酒の座では、必ず座をはずした者の悪口を酒の肴にする癖があったせいでも」あったからで、このことも、アサ代が生きている社会のあり方を示している。隠れて耳を澄ましてみると、やはり男性たちは警察予備隊から休暇で村に帰っているアサ代の三男の噂をしているのであった。「前の兵隊でも、休暇をくれたら必ず戦地へ引っ張りだした。アサ姉の予備隊息子も、たいてい朝鮮戦争の馬の足にしられるんど」[28]と重造は言い、「万一死ぬりゃー蟻ごが死んだも同じことよ、誰が世話をしてくれるか」と村会議員の寅一が言う。

アサ代は、総領息子に戦死され、二男には分家させるつもりであるため、三男に死なれたら誰も彼女の面倒を見てくれる人がいない。したがって二人の悪口は「アサ代の不安の一番中心を衝いた」[29]のであった。アサ代は、どうせ退席した自分の噂をしているに違いないと分かっていたが、敵だと思っている彼らに自分が最も心配していることを見抜かれていることにショックを受ける。それと同時に、何よりもアサ代は、自分の弱さを実感さ

せられ、この瞬間に被害者性を自覚する。

そして、男性たちがいる場所から少し離れると、アサ代の耳に入ってくるのは、今度は老女の娘と同じように移住してきた二人の未亡人の泣き声である。その瞬間に、アサ代も「さっきのくやしさがせきをきってでるよう」に、涙が急に溢れ出してくるのであった。つまり、自分も、この戦争未亡人たちと同じように虐げられているのだと感じ、ここではじめて、自分と同じ立場にいる女性たちへの共感が生まれたといえる。

しかし、彼女は、「自分の涙がどうして出るのか」わからない。そのうえ、「わかろうとする気があるような無いような、たとえ涙の原因を考えてみようとしたところで、毎日忙しい忙しいと仕事に追われ、……ただ忙しいということが岩石のようにかたまって思えるだけ」[30] だと、彼女は感じている。つまり、自分を抑圧しているものとは何か、長年なぜそこまで辛抱せざるを得なかったのか、「自分の足や顔がこんなにもきたえられねばならなかった世界のことを」[31] 問うてみたところで、どうせ重労働と周囲との闘いの毎日は変わらないのだと、アサ代は思っている。虐げられている女性たちが、足を引っ張り合うのをやめ、お互いに「秘密の守れるふところに」なり、「補足になるような批判」を行い、思っていることを正直に言えるようにならない限り、涙の理由を考えたとしても、状況は改善されないのである。

最後の場面で、アサ代は帰り道に、ふたたび男性たちが話しているのを聞く。耳を澄ましてみると、「〔老女の娘は〕おとなしうなるし、一人になるし」、彼女のところへ「通い手が大勢出来うて、言うても常にない別品じゃ……ハハ」と、笑って老女の娘の話をしている。つまり、一人になり、困るであろう彼女に、男性たちはつけ入ろうとしているのである。戦争未亡人たちに対する共感が湧き、涙を流したばかりのアサ代は、男性たちの話を聞いてどのように思うのであろう。

しかし、物語は、「アサ代の心には、今夜の喪主が焼場の半焼を見に行く時、一緒に行ってやろうと言う親切もまだ湧いてはこなかった」[32] という語りで、終わってしまう。アサ代に共感が湧いてきても、それを行動とし

て表すには至らないように見えるが、「まだ」という言葉は、とても重要なキーワードである。この時点では、アサ代には老女の娘を助ける気持ちは湧いてきていないが、もう少し時間が経てば、アサ代は駆けつけて彼女に同行してやるかもしれない。そうなるには、数日、数ヶ月、数年かかるかもしれない。しかし、アサ代の心に変化が起こったことは確かだろう。「いたどりの茂るまで」のオリカより、団結に向けて一歩前進していることも確かである。オリカは自分の被害者性に気づいてはいるものの、その自覚は、他の虐げられている女性たちへの共感と結びつくことはなかったからである。

おわりに

アサ代が涙を流した時点で、女性たちへの共感は生まれ得た。それは、すぐには団結と助け合いにはつながらないかもしれないが、「まだ」というただ一つの言葉で、いずれはきっと連帯は生まれてくるのだと、山代巴は期待を持たせてくれるのである。1956 年に書かれる『荷車の歌』の主人公セキは、連帯に目覚め、勇気を持って発言し、女性たちから言葉を引き出すために、自分の人生の歩みを呼び水にしており、アサ代よりさらに大きな一歩を踏み出している。そこでは、「人権」と「平和」への目覚めが決定的な役割を果たしていると考えられるが、オリカとアサ代がつくった素地がなければ、『荷車の歌』のセキは生まれなかったであろう。

このように「或るとむらい」は、山代巴文学における女性像の重要な転換を表しているとともに、時代を超越した〈人間性〉というものに対する山代巴の深い洞察力を示し、今もなお同化と排除の両極化に進む日本社会を見つめなおすきっかけを与えてくれる。

［注］

1） 2014年度大阪大学大学院文学研究科修士論文、未刊行。ただし、そのうちの一部は拙稿「被爆体験を〈書く〉―山代巴と『原爆に生きて』『この世界の片隅で』を中心に―」（『原爆文学研究』第13号、2014年12月）として発表済みである。
2） 『山代巴文庫 第二期（六）私の学んだこと』（径書房、1990年。以下「 山代巴文庫第二期（六）」と略記する）、p.99。初出は、山代巴「城間功順を通して知る栗原先生」、栗原広子編『続 未完の回想』、非売品、1983年。
3） 山代巴文庫　第二期（六）、p.195。初出は、山代巴「解説」『武谷三男著作集6　文化論』頸草書房、1969年。
4） 山代巴『山代巴文庫　第二期（一）岩でできた列島』（径書房、1990年。以下「山代巴文庫　第二期（一）」と略記する）、p.228。初出は、「村の文化活動」『青年文化』1947年11月号。
5） 山代巴『山代巴文庫　第二期（三）荷車の歌』（径書房、1990年。以下「山代巴文庫第二期（三）」と略記する）、p.206。初出は、「歴史を追って現在に向かう」『展望』160号（筑摩書房・1972年）。
6） 山代巴文庫　第二期（一）「或るとむらい」、p.165。初出は、『世界』1951年12月号。
7） 同前、p.167
8） 同前、p.169
9） 同前、p.169
10） お互い監視し、非協力的な態度を取り合うこと。そのような意味での「陥れ合い」は、農村社会において民主主義や人権意識の高揚をもっとも阻害する態度だと、山代巴は考えていた。
11） 長岡弘芳『原爆文学史』、風媒社、1973年、p.18
12） 山代巴文庫　第二期（一）「或るとむらい」、p.202
13） 同前、p.211
14） 大江健三郎選『何とも知れない未来に』、集英社、1983年、p.380
15） 同前、p.382
16） 山代巴文庫　第二期（三）、p.206。初出は、山代巴「歴史を追って現在に向かう」、『展望』160号、筑摩書房、1972年。
17） 山代巴文庫 第二期（一）「或るとむらい」、p.176
18） 同前、p.176
19） 同前、p.176
20） 同前、p.177
21） 山代巴『山代巴文庫　第二期（二）おかねさん』径書房、1992年、p.41。初出は、山代巴「いたどりの茂るまで」、『世界』1950年4月号、岩波書店。

22）山代巴文庫　第二期（一）、p.107。初出は、「芽ぐむころ」『新日本文学』1951年1～3、5～8号、新日本文学会。
23）山代巴文庫　第二期（三）、p.203。初出は、「歴史を追って現在に向かう」、『展望』160号、筑摩書房、1972年。
24）「いたどりの茂るまで」や「或るとむらい」が発表された『世界』のようなインテリ雑誌は、農村女性の目にふれることはほとんどなかったであろう。しかし、山代巴の作品は、活字になる前に、農村の集会へ持ち出され、農民にわかりやすいように山代巴によって話されていたし、紙芝居などを用いて演じられる場合もあった。
25）大江健三郎選『何とも知れない未来に』、p.382
26）山代巴文庫　第二期（一）「或るとむらい」、p.189
27）同前、p.189
28）同前、p.210
29）同前、p.211
30）同前、p.212
31）同前、p.177
32）同前、p.213

（大学院修士課程修了）

SUMMARY

A Study on Yamashiro Tomoe's *Aru Tomurai* (A Funeral)
—Focusing on Issues concerning Relationships between Women in Rural Society —

Chiara Comastri

Keywords: Yamashiro Tomoe, Japanese rural society, women writing, Hiroshima atomic bomb, Post-War culture

Yamashiro Tomoe (1912-2004) was a well-known writer especially during the 60's due to the popularity of *Niguruma no Uta* (Chikuma Shobo, 1956), a novel which narrates the life struggles of a woman from a rural village from the end of the Meiji period until Japan's economic growth in the 1950's. The main subject in Yamashiro Tomoe's novels is, in fact, the condition of women living in the rural society of Bingo, an area in the eastern part of Hiroshima Prefecture, which was also the author's hometown. What is interesting about Yamashiro's approach in her novels is that, whilst she focuses on the fact that women are indeed victims, she also highlights their role as (unconscious) oppressors of other women in their everyday lives. In this way Yamashiro presents the literary text as a 'mirror' (kagami) in which these women, when reading, can reflect themselves as both victims and oppressors. Yamashiro's goal through this was to raise awareness of issues regarding relationships between women in rural areas and to bring solidarity between them.

The novel *Aru Tomurai* (1952, published on 'Sekai') features these very issues, showing a protagonist who is both the oppressor (kagaisha) and the oppressed (higaisha). The atomic bomb, another important theme in Yamashiro's literature, is also present in this novel. *Aru Tomurai* shows us the mechanisms in Japanese rural society at that time, and also gives us a view into the lives of 'hibakusha' (victims of the atomic bomb) who escaped from Hiroshima to the countryside.

This essay has mainly two aims: firstly, to bring to light an almost forgotten but extremely valuable piece of work from Yamashiro Tomoe, secondly, to prove that this novel shows us an important turning point in the writer's production. In the first paragraph, I describe the main themes of the novel and explain the cultural

context in which it was written, including some details about Yamashiro Tomoe's personal experience as secretary in the Hiroshima Prefecture Farmers Union. In the second paragraph, I examine the story from the perspective of gender. In the third paragraph, I express my critical opinion about *Aru Tomurai* as an 'atomic bomb literature' piece, as it was evaluated in the 70's and 80's. I conclude my dissertation with a deep analysis of Asayo, the main female character of the novel.